

4つの予言と 私たちの未来

衝撃の一冊

行きがかり上、ここ2か月で5冊ほど本を読むことになった。シベリアのタイガにひとり暮らす神秘的な美女が、地球を癒す数々の知恵を披瀝する『アナスタシア』をはじめ、どれも素晴らしい本ばかりだ。

ところが、その中の一冊に強い衝撃を受けてしまった。“グランドファザー”と呼ばれるアメリカ先住民の伝説的な人物を描いたものだ。そこには、やがて人類に起こるであろう4つの予言が記されていたのだ。

元来楽天的な私は、これまで予言の類などほとんど気に止めてこなかった。どうせ人を脅かしてお金儲けのタネにするのでは…位にしか思えなかったのだ。

ところが、この「グランドファザー」なる人物の、献身的な地球に対する愛情と、生涯を通じて求道的なまでに、まさに命がけで真理を探究する姿勢。それを知った上で、伝えられたその言葉の重みに、目を背けることができなくなってしまった。

4つの予言

1920年代にグランドファザーが精霊から伝えられたという、その予言のあらましはこうだ。

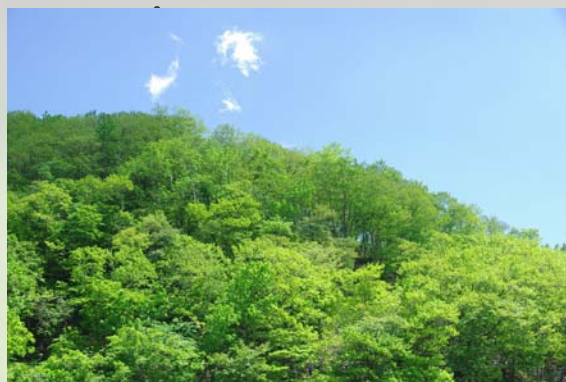
第1の予言は、アフリカと思われる土地で生じた飢饉と性的干渉で拡大する原因不明の病（エイズと思われる）について。それは人々が自然から離れた結果生じており、この時点で人が気付くならば、地球はまだ物理的に修復可能であったという。

さらに第2の予言では、空に大きな穴があり、洪水や津波などの自然災害の様相を、そしてイルカが海岸に打ち上げられ、瓦礫が高く積み上げられている姿について見せられた。（オゾンホールとその後の世界的な自然災害と思われる）

グランドファザーの教え子であり、本の著者であるトム・ブラウン・ジュニア氏がはじ

めてその予言を聞かされた1960年代でさえ、空に穴が開くなど想像すらできなかったことだ。それが現実になってし

まった。2つ目の予言が起こったら、もはや物理的な修復は困難で、祈りなど精神的な解決方法でしか道は見出せないという。私たちが自然に対する慈しみを取り戻し、破壊的なその生き方を改めることで、破局は避けられるのだ。



私達は変わることができるのか？

ところが、3つめの予言が実現したならば、もう後戻りできない。人々は自然の中で草を食み、サバイバルすることでしか生き残ることはできないそうだ。

その第3の予言では、昼も夜も空が赤く血の色に染まり、世界中でそれが観察されるという。そして、それに続く10年後に起こる最後の予言は、自然破壊によるしっぺ返しを受け、飢餓の中で人が人を食らう世の中となる。文明は終焉し、人類は自滅してゆく…。

もっとも、予言というものは決して確定したものではないそうだ。しかし、それは、もし人々が今のまま変わることがなければ、限りなく実現する可能性が高い未来だという。

笑えない現実

はたして、これを絵空事だと一笑に伏すことができるだろうか。現実はどうなっているだろう。日本の現状を考えただけでも背筋が寒くなる思いがする。仮に、ではあるが、次のような事は充分想定されるのではないか。

・自民勝利？→憲法改正→自衛軍創設→日本は戦争できる普通の国になる→アメリカの始めた戦争に参加→人命と自然の破壊へ（劣化ウラン弾などの核兵器も使用されるだろう）

・原発推進→大震災の発生→メルトダウン→水や空気、食物の汚染→生活基盤の喪失

・TPP参加→地域農業の崩壊→自然災害や経済混乱による輸入停止→飢餓の発生



グランドファザーの予言する未来へ確実に近づいているように思えてならない。

「おじいちゃん、どうして何もしてくれなかったのですか…」

それは40日間に及んだビジョンクエストという伝統的な修行の中で、トム氏が見せられた幻視だった。子供達が人肉を漁る凄惨でリアル

な未来の中で、孫と思われる老人からそう語りかけられたのだ。その言葉に、まるで私自身に向けられているかのようなショックを受けた。

ほんとうに私たちは人災によって破滅しようとしているのだろうか。もしそうならば、私たちは根本的な部分から変わる必要がある。

困難の理由とは？

この世界をそのような困難に陥れている一番の理由は何だろう。20年前、まだ私がまほろばに来る前に、一年間ずっとそのことを考え続けた時期がある。答えは見つからなかったが、人の意識が変わることが一番ではないかと、その時思った。

その後北海道に戻り、電話帳で見つけたまほろばの広告に惹かれ、入社する縁ができた。そこに書かれていた「アウェア ストリーム AWARE STREM 目覚めの潮流」という言葉が心に響いた。

そうして働きはじめて半年後、不思議な体験をした。当たり前と思っていた自然界の営みがあって、はじめて生かされる自分。その事にハタと気づいたのだ。その時、朦朧とする意識の中で、腸内細菌も、イスも、宇宙も、すべてが一つにつながっていて、深い一体感の中で至福に包み込まれてしまった。そして私は、ようやく問題の原因と、その解決方法が理解できた。原因は、「分離」であり、解決方法は「ひとつ」に気づくことなのではないかと、その時心に浮かんだのだ。

宇宙という生命

人と自然、人と人、民族の対立…その分離感が破壊を生み出す温床ではないだろうか。

宇宙はひとつの生き物。地球もそう。すべて重力や引力というバランスと、見えないエネルギー循環で絶妙に成り立っている。それは人間のコントロールの及ばない、神の摂理でもある。

そこには自他もない、領土もない、差別も偏見もない。自然を汚すことは自分を汚すこと。人を傷つけることは自分を傷つけること。

私たちがその事実気づくことで、おそらく多くの問題が解決に向かうだろう。

和の心

シャキシャキのアスパラやプリプリのホタテは、清浄な水や空気、大地や海の賜物なのだ。私たちは自然なくしては一秒たりとも生きてはいけないし、その一部に他ならない。

それは、あらゆるものと一体となる和の心。縄文やアイヌが伝えてきた自然との一体感。八百万の神々と暮らす、日本的なものの見方として、私たちのDNAにしっかりと刻印されているはずだ。

しかし、20年かかって、暮らしの中で実践するのは骨の折れることで、まだまだ思いに行動が追いついていないのが実情だ。未だ人の心や自然を慮ることのできない自分がある。

それでも私は思うのだ。ここからしか私たちの未来は始まらないと。

すべての責任の所在

すべてがひとつという事への理解により、も

う一つ、意識の転換が生じる。それは、あらゆる事が自分の責任だと捉えられること。政治や原発の問題、その結果生じるであろう事々。すべてつながっているならば、いずれその責は自分に降りかかるのだ。誰かのせいにしたところで、その時にはもうどうしようもない。

自分の責任として、自分の未来をどうクリエイトしてゆくのか、それが大切なのだ。

まずは小さな気づきから

人類すべてが悟りを得ない限り無理なのか？ そんなことはない。ただ、私たちが気づきさえすればよいだけなのだ。些細な疑問に向き合い、自らに問いかけることで、おのずと答えはやってくる。常識だからとか、世間の皆がそうだからとか、そんな従来の思考からではなく、自らのこころの、わだかまりのないすっきりと澄み渡るその思いに従うことだ。

杞憂であってほしい

正直言うと、今回こうした内容を記事にする事が、はたしてどうなのか、と随分悩んだ。否

定的なイメージを多くの人に与えてしまうのではないか、単に人を不安に陥れるだけではないか…。

できることなら自分がその書物に騙されているだけであってほしい。杞憂だったと、いつか笑われたらなお良い。この

先何事もなく、平和で穏やかな日々が、永遠に続いてほしい…。

しかし、現実から目をそむけるわけにはいかない。目の前にはまだ原発があり、戦争があり、TPPが、人々の分断が、自然を破壊し、拡大し続ける私たちヒトの営みが横たわっている。



私たちにできることは？

今の私にできることと言えば、こうしてわずかな望みを認めること位だ。そんなちっぽけな、何の力にもならないような者にさえ、自然はやさしく、こうささやきかける。

「本当の自分を思い出しなさい。すべてとつながるあなたを。そしてあなたの方の本当の力を思い出しなさい。すべてとひとつにつながる時、そこには何一つ不可能なことなどないのだから…。」

いったい今、私は、そして私たちは、どうすればよいというのだろう。

それぞれが精一杯、明るい未来を心の中に、できるだけ鮮やかに描きつつ、過去や将来を憂うのではなく、今この瞬間、自らに与えられた能力を、世界への奉仕として歓びと共に最大限発揮すること。

時には悩み、立ち止り、振り返ることがあってもよいのではないか。そういう自分をも許し、



愛し、慈しむことで、はじめて他者にもそうあれる。

そうして、いつの日か、誰もが至福に満ち溢れ「イツモシズカニ ワラッテイル」そんな風になれたら最高ではないだろうか。

2050 年

もはや世界に争いはない
人と人が殺しあうことはない
誰かが誰かを傷つけることもない
なぜならば、すべてが自分自身であり
自分でないものなどひとつもないのだと
誰もが知ってしまったから
人は人を自分自身のように大切にし
自分自身をも人のように大切に扱う
自然を汚すものもなく
緑は甦り
地上は生命の宴に酔う
すべての人は、その自然こそが自分を産んだ
母であることを知り
この天が父であることを理解し
宇宙が大いなるひとつの生命なのだと
心から知っているから
今いるこの場所が
本当はそのまま天国だったのだと
気づいたから
地上は平和に満ち
神々の微笑と、生き物たちの唄に満ち
互いに助け合い、補い合う人々の
笑い声に満ちて
とこしえにとこしえに繁栄することだろう

(編集部 島田 浩)